

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(2年計画の 1年度目)

1. 研究課題

(和文) 雲岡石窟の研究

(英文) A Study of the Yun-Gang Buddhist Cave-temples

2. 研究代表者

(氏名) 岡村秀典

3. 研究期間

平成 25 年 4 月 から 平成 27 年 3 月 まで

4. 研究目的 (400字程度)

中国山西省大同市に所在する雲岡石窟は、北魏時代の460年に都平城の西郊で開鑿のはじまった仏教寺院である。本研究所の前身である東方文化研究所は1938～1944年の7次にわたってこれを悉皆調査し、水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』全16巻32冊(1951-56年)として調査報告書が刊行されている。当研究所には写真・実測図・拓本など数万点の記録類が保管されており、それを将来にわたって保存し活用していくために、当研究班は組織された。2012年に『雲岡石窟』のPDFを京都大学学術情報リポジトリ「紅」に公開したことが世界的な反響を呼び、本研究所と中国社会科学院考古研究所との共同編集により『雲岡石窟』中国語版と旧版未収録の写真・拓本類を集めた新編『雲岡石窟』の公刊が計画されるにいたった。これを遂行するため、当研究班では写真・拓本類の整理を進めるとともに、中国南北朝時代の仏教寺院にかんする総合的な共同研究を推進しようとするものである。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

東方文化研究所が1938～1944年に調査した中国山西省雲岡石窟について、中国社会科学院考古研究所との共同編集により『雲岡石窟』全20巻41冊を中国の科学出版社から日中両国で刊行することになり、水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』の図版解説を会読するとともに、報告書に未収録の写真を整理する検討会を実施した。また、中国における最新の発掘調査について意見交換をおこなうため、9月20日に中国社会科学院考古研究所の朱岩石・李裕群研究員、山西省太原市考古研究所の常一民副所長を招聘して国際シンポジウム「中国北朝仏教寺院の研究」を主催し、翌21日には大阪市立美術館での公開講演会「中国古代寺院に迫る」を共催した。さらに、12月17日には雲岡石窟博物館の劉建軍館長を招聘して国際シンポジウム「雲岡石窟研究の現在」を開催し、劉建軍「北魏時期雲岡石窟的洞窟与寺院討論」と題する講演のほか、石松日奈子「雲岡石窟の中国式如来像について」、向井佑介「雲岡石窟の仏塔意匠」の研究報告があった。

6. 研究成果の概要 (400字程度)

当研究所と中国社会科学院考古研究所との共同監修による『雲岡石窟』(日本語版・中国語版とも各20巻41冊)を中国科学出版社から刊行することになり、その第一期分全7巻(15冊)を、日本語版は2013年12月、中国語版は2014年3月に刊行した。また、9月20日に中国社会科学院考

古研究所の朱岩石・李裕群研究員、山西省太原市考古研究所の常一民副所長を招聘して国際シンポジウム「中国北朝仏教寺院の研究」を主催し、翌21日には大阪市立美術館での公開講演会「中国古代寺院に迫る」を共催した。講演者と演題は次のとおり。朱岩石「鄴城遺址北吳荘佛教造像埋藏坑與北朝佛寺遺迹發現與研究」、李裕群「山西省太原市晉陽童子寺考古發現與研究」、常一民「山西省太原市龍泉寺唐代塔基考古發現與研究」。さらに、12月17日には雲岡石窟博物館の劉建軍館長を招聘して国際シンポジウム「雲岡石窟研究の現在」を開催し、劉建軍「北魏時期雲岡石窟的洞窟与寺院討論」と題する講演のほか、石松日奈子「雲岡石窟の中国式如来像について一身体表現と着衣」、向井佑介「雲岡石窟の仏塔意匠」の研究報告があった。

7. 共同研究会に関連した公表実績（出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など）
 京都大学人文科学研究所・中国社会科学院考古研究所監修（岡村秀典総監修）『雲岡石窟』（日本語版・中国語版とも各20巻41冊）、中国科学出版社
 公開シンポジウム「中国北朝仏教寺院の研究」9月21日、京都大学人文科学研究所
 公開講演会「中国古代寺院に迫る」9月21日、大阪市立美術館
 公開シンポジウム「雲岡石窟研究の現在」12月17日、京都大学人文科学研究所

8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区 分	機関数	受入人数		延べ人数			
		外国人	大学院生	外国人	大学院生		
学内（法人内）	1	3	0	2	129	0	76
国立大学	1	1			1		
公立大学	1	1			38		
私立大学	3	3		1	114	24	
大学共同利用機関法人	1	1			25		
独立行政法人等公的研究機関	3	3			75		
民間機関							
外国機関							
その他							
計	10	12		3	382	24	76

研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

（例）・1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた（参加した場合）：参加人数2人、延べ人数6人

9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

（参加研究者がファーストオーサーであるものを対象）

論文数	3	
うち国際学術誌に掲載された論文数	3 (1)	()

※下段の（ ）内には、拠点外の研究者による成果（内数）を記載。

(注) 分野の特性を踏まえて、参加研究者がファーストオーサーである場合の他に、コレスポンディングオーサーである場合や指導した大学院生がファーストオーサーになっている場合など、論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合は、その役割を明示の上で論文数を記載。

役割	コレスポンディングオーサー		
論文数	1		
うち国際学術誌に掲載された論文数	1 (1)		()

※下段の () 内には、拠点外の研究者による成果 (内数) を記載。

※ 高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、掲載論文数、そのうち主なものを以下に記載。

※ 拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
東方学報	3	仏塔の中国的変容	<u>向井佑介</u>

(注) インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合は、以下に適切な指標とその理由を記載上で、掲載雑誌名等を記載。

拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

インパクトファクター以外の指標とその理由		主なもの	
掲載雑誌名	掲載論文数	論文名	発表者名